

特集 戦後75年を想う

A 戦争体験記・聞き書き

B エッセイ・小論文

C 平和を呼ぶ声

山波財団の機関誌に、上記のテーマで原稿を募集いたしました。ご投稿下さった皆さま有難うございました。

川元徳次郎 - 「白菊隊」と呼ばれた海軍神風特攻隊司令を 第二次世界大戦中に務めたクリスチャン

Tokujiro Kawamoto – A Christian who served as a navy
commander of the Kamikaze Special Attack Unit called
“Shiragiku-tai” during the World War II

渡 里香 Rika WATARI

<Summary>

Tokujiro Kawamoto was born in Nejime, Kagoshima in 1897 as the first son of one of the old Samurai families of that district, and was soon baptized a Catholic. After graduating from the Japan Navy Academy located at Etajima in 1920, providing excellent human resources to the Navy, Tokujiro pursued a career as a navy man and was promoted to Colonel in 1944.

His final mission was a Captain of “Kamikaze” Special Attack Unit, called as “Shiragiku-tai”, belonging to the Tokushima Navy Air Base. Even though it was obvious in 1944-1945 that Japan was losing the Pacific War, Army as well as Navy tried to believe that Kamikaze, “divine wind”, would blow and defeat the enemy. As a Captain, under undeniable mission, he shook his cap to young navy pilots and saw them off when they were taking off from the base in order to fulfill their duty of suicide attack. Their aircrafts named “Shiragiku” were basically used for training, not for attacking. In the final stage of the War, “Zero” fighters for suicide attack were spent out and not available, that is the reason why they had no choice but to use “Shiragiku” of inferior functions. About 30 “Shiragiku” pilots died, who attempted to crash their aircrafts loaded with bombs into enemy warships.

Regarding the concept of “suicide attack”, death instead of defeat, capture and shame was highly respected as an honor in Japanese military culture, like one of the primary values in Samurai life. On the other hand, people can't forget the serious fact that 3000 precious lives of young pilots were lost during the war and more than 7000 US naval personnel were killed by Kamikaze Attack. Of course, Tokujiro, as one of navy commanders, shares strong responsibility for that.

Tokujiro spent the rest of his life very quietly, and had never attended any social events and activities since the end of the war. His wife, Fumi Kawamoto, was a poet writing a traditional Japanese poem, called “tanka”, consisting of 31 Japanese characters. Fumi kept watching her husband in daily life and composed a series of “tanka” poems describing his long-lasting mental anguish caused by Kamikaze Special Attack during the war. They clearly show that Tokujiro, as a religious Christian as well as a Samurai, spent every day, month and year for consoling the spirits of his young pilots sacrificed in the war and apologizing their families.

Reference:

「人類の最大犯罪は戦争」 桑原 啓善 著： でくのぼう出版（鎌倉、2010）

"The biggest crime of humankind is war" by Hiroyoshi KUWAHARA: Dekunobo Publishing (Kamakura, 2010)

海軍特攻隊司令を務めたクリスチャン川元徳次郎のこと

海軍特攻隊司令を務めたクリスチャン 川元徳次郎のこと

渡 里香

私が敬愛するT叔父に「サムライ・平和」を寄贈した時のことだ。

その中には、第5号山波言太郎（桑原啓善）先生の戦争体験が記録されていたものも含まれていた。その体験記を読んだT叔父は、後日、私に「山波先生は非常に素晴らしい経験をされたようですね。実は、我々の親族にも、海軍特攻隊司令になっていた方がおられますよ。近く資料を送ります。」というご返事をくれた。

その方のお名前は「川元徳次郎」という私の母方の遠い親族の方であった。

私の両親は薩摩（鹿児島）の出身で、幕末の維新の激動の時期に西郷隆盛と共に日本の未来のために命を懸けて戦った方々を先祖に持つ。T叔父はその記録をさらに正確に詳細に調べており、その交流の中での出来事であった。私の高祖父とT叔父の曾祖父が同じ方で、川元家がルーツであった。

私はこの「川元徳次郎」のことを知った時に、一種の感動に身を震わせた。その方は、紛れも

ない薩摩の武士の末裔で、非常に優秀な方であり、またクリスチャンであった。かつ山波言太郎（桑原啓善）先生と同時期に非常に近い場所で、第二次世界大戦中、終盤の最も過酷な状況下で、海軍特攻隊司令を務めておられたのだ。言葉にできない感情と涙が今も溢れてくる。

地元では有名な海軍の英雄

角川書店が編さんした日本姓氏歴史人物大辞典46に「鹿児島県姓氏家系大辞典」がある（平成6年初版発行、編さん委員会）。その中に、私の母方の出身地である肝属郡根占周辺（現在の南大隅町）の豪族の歴史が記述されていて、また、その地区から輩出した村長、国会議員、武道家、軍人ら、著名人についても若干の紹介がされている。明治以降では、著名な軍人として川元徳次郎大佐の名もあり、第二次大戦中に掃海艇の艇長や海軍特攻隊の白菊隊を編成した司令としての軍功が記述されている。つまり、徳次郎は太平洋戦争で活躍した地元の英雄なのであり、T叔父が数年前に鹿児島県肝属郡南大隅町の遠縁の親戚を訪ねた際にも、「あの海軍の艦長さん」として多くの人が知っていたとのことであった。

しかし、川元徳次郎は、そのように人々から讃えられることを喜んでおられたであろうか。海軍特攻隊司令という海軍大佐としての最後の任務が、戦後の徳次郎の生き方にどのような影響を与えたのか、私の知り得たことを記し、想いを伝えたい。

海軍特攻隊司令を務めたクリスチャン川元徳次郎のこと

薩摩に数百年続く旧家の長男として生まれる

川元徳次郎は、明治30年（1897年）12月14日、鹿児島県肝属郡小根占村の旧家、川元家の長男として生まれた。両親の川元儀治・安子は、ともに、キリスト教徒（カトリック）であり、徳次郎も誕生後、洗礼を受けたものと思われる（洗礼名…ペテロ）。後年、徳次郎はふみを妻として迎える。陸軍将校の娘として育ったふみも20歳の時に洗礼を受けたとのことである。（姪の西本淳子の証言）。

海軍兵学校（江田島）から徳島海軍航空基地の特攻隊司令へ

徳島海軍航空基地 (<http://shinkokunippou.blog122.fc2.com/blog-entry-417.html?sp>)

などインターネットに掲載されている多くの情報を中心にしてまとめると、川元徳次郎の軍歴は以下のようなものであった。

川元徳次郎は、海軍におけるエリート将校の養成機関であった海軍兵学校に入学、大正9年（1920年）7月に卒業の第48期生172名の一人である。海軍兵学校は、海軍操練所、海軍兵学校を前身として明治9年（1876年）に開校したが、明治21年に安芸郡江田島町（現江田島市）に移転した。以後、昭和20年まで海軍人材（とくに将校）を供給してきた。その教育方針はユニークかつ国際的で、第二次大戦中の校長井上成美は、英語教育・教養教育を意識的に実施した。これは、敵国語として英語教育を廃止した偏狭な陸軍士官学校とは全く異なった教育方針であり、クリス

チャンの徳次郎の体質にはなじむものであったに違いない。

卒業後の徳次郎は、第六掃海艇々長などを経て、徳島海軍航空基地へ配属される。1940年、徳島航空隊副長兼教頭、そして1943年12月、司令に就任する。昭和19年（1944年）5月1日には海軍大佐に昇進、海軍平時の最高位となる。昭和20年に入り、日本軍の敗色濃くなる中、本土への焼夷弾攻撃がはじまり、大都市では一般市民と市街地への無差別爆撃が続ぎ、次第に日本は焦土と化していった。米軍が沖繩に迫る中、5月、追い詰められた海軍は「菊水作戦」の名の下に神風特別攻撃隊を編成、その結果、人命と航空機の消耗が急速に進み始めた。やがて零戦（ゼロ式戦闘機）など実用機が払底し、練習機「白菊」も特攻機に指定されるようになった。このような絶望的な状況の中、昭和20年（1945年）5月下旬、川元徳次郎大佐は「徳島白菊隊」第一中隊30機を率いて串良海岸航空基地に移動した。数日後、川元徳次郎大佐が送り出した白菊隊（第一、第二）は沖繩周辺海域の米艦船群に突入し、戦果を挙げつつも若き命を散らした（海軍では散華と表現）。日本が無条件降伏に追い込まれたのは、その三か月後である。

太平洋戦争終結後の川元徳次郎

戦争末期に多くの有為の若者を絶望的な戦地に送り続けねばならなかった川元徳次郎のその後の日常は、どのようなものであったろうか。ましてクリスマスチャンとして聖書の教えを忠実に守り成長した彼が、戦争末期に味わった苦悩は言うまでもなく深く重いものであったに相違ない。

海軍特攻隊司令を務めたクリスチャン川元徳次郎のこと

「特別攻撃」は“suicide attack”と英訳されているが、直訳すれば「自殺攻撃」である。しかし、本質は通常の自殺ではない。絶対服従の軍の命令の下、好むと好まざるとにかかわらず、命を捨てて敵艦に体当たりすることを強要されたのである。有為の若者たちには無限の将来があったはずである。選択の余地なく無念の思いを胸にして死地に赴いた若者たちに帽子を振って送り出した川元徳次郎の胸の内は…。敗戦の将の中には死なせてしまった部下たちを思い、またその家族への贖罪に苦しむ人たちが多いと聞く。徳次郎の戦後はどのような様子だったのだろうか。

実は、戦後の徳次郎の様子については、歌人であった妻の川元ふみが詠んだ短歌からその一部を推し量ることができる。

川元ふみの歌集から和歌をいくつか以下に紹介させていただく。これらは、徳次郎の姪にあたる西本淳子が歌集から直接書き留めたものであり、私の叔父を通して知ったことを記しておく。

戦争に 敗れて帰郷せし夫の 寡黙の日々に 安らぎはなし

過去曳きて 生きる夫に恵まるる 長寿といふは 厳しからむか

江田島の 教育今も見る如く 老いたる夫の 直ぐなる背筋

放送の 白菊特攻隊かつて 司令たりし夫の 端座して聞く

旧約の 詩編のごとく枯草の 風に吹かれて 夫みまかりぬ

弔電の 先ず読まれしは特攻隊 白菊隊の 部下よりのもの
戦死せし 部下の命日 年毎に 夫は供花を 持ちて詣づる

前述したように、川元徳次郎は夫妻とも敬虔なカトリック教徒である。かつての特別攻撃隊の隊長としていかに自責の念に堪え切れなくても、あるいはそのための苦悩がいかに大きくとも、自ら命を絶つことは出来なかつたのではないだろうか。自殺はキリスト教においては少なくとも中世までは宗教上の罪とされてきた。そうでなくとも、死地に送り出した若者たちや彼らの家族の悲しみを思い、生涯しずかに鎮魂の時を過ごす選択をしたのではあるまいか。それ以外の生き方は無かつたのかもしれない。

川元徳次郎・ふみ夫妻の晩年は、折角生きて帰還できた命であつたが自責の念に駆られる十字架を背負つた、磔刑ともいえる日々であつたらうことが想われる。

山波言太郎（桑原啓善）先生の残された「人類の最大犯罪は戦争」という戦争体験記は、そのまま、川元徳次郎・ふみ夫妻の体験にも通じ、その著作の中で指摘される「自己加害者の立場に立たない平和運動は永久に無力です。」というメッセージと響き合っている。

いつになったら、戦争のない世を創れるだろうか？

江戸末期の志士より強靱な信念が令和の時代に生きる我々にあるだろうか？

海軍特攻隊司令を務めたクリスチャン川元徳次郎のこと

逝った方々の未来である現在に生きる我々は、
さらに重い十字架を背負っている。
天とともに……。

謝辞

「川元ふみ歌集」から一連の和歌をご紹介下さった西本淳子、関連資料をご教示頂いた田中一宜の両氏に深甚の謝意を表します。奇しくも、この原稿は、写真の撮影された1945年5月24日その後、満75年後2020年5月24日、に完成致しました。

参考文献

- 「人類の最大犯罪は戦争」桑原啓善著…でくのぼう出版
(鎌倉、2010年)
(桑原啓善はペンネーム山波言太郎として定期刊行誌
「サムライ・平和」を主宰していた)



菊水七號作戦により出撃前の徳島第一白菊隊(14機)の記念撮影。
前列中央が司令の川元徳次郎大佐(1945年5月24日/串良基地)
(shinkokunippon.blog122.fc2.com/blog-entry-417.html?sp)